

# 認知的観点による与格構文指導

On the Effect of Teaching Dative Construction From the Perspective of Cognitive Grammar

## —前置詞の選択を中心に—

: With a Focus on the Selection of the Preposition *TO* or *FOR*

中川 右也\*\*  
NAKAGAWA Yuya

### Abstract

This study aims to investigate the effects of teaching methodologies through cognitive-used practices. Focusing on which to choose, *to* or *for*, as the appropriate preposition following verbs in dative constructions, this experimental study was conducted in order to examine the effects of the two teaching approaches (teaching formally and semantically versus teaching with cognitive approach). In this experiment, there were 169 students divided into two groups. The result of the post tests given to the students showed that the cognitive approach was significantly better in that they retained the correct prepositions in dative constructions.

【Key Words】：二重目的語構文, 認知文法, 与格構文, 与格交替, 前置詞

#### 1. はじめに

Pinker(1989)によると、子供の言語獲得において与格構文から二重目的語構文への与格交替は、たとえ聞いたことのない動詞であっても自然に一般化されるという。学校文法では与格構文は第3文型、二重目的語構文は第4文型とし、それぞれ異なる文型であると教えた後、両者には意味的な類似性が認められるとして両者の書き換えを指導する。中川(2008)では両者の意味的な相違を明らかにした上で、与格構文における前置詞の選択について従来の指導方法の問題点を指摘した。従来の指導方法を大別すると二種類ある。すなわち、意味的観点から、「方向性」を含意する動詞は *to* 与格構文に、「受益性」を含意する動詞は *for* 与格構文になると教える方法と、統語的観点から、間接目的語がなければ成立しない動詞は *to* 与格構文に、成立する動詞は *for* 与格構文になると

教える方法である。しかし、これらの指導方法では日本語の干渉を受ける場合や、例外的な事象が存在することによって習得が妨げられることが予想される。認知言語学的アプローチを用いた Tyler and Evans(2003)では、前置詞 *to* と *for* の相違を分析し、前置詞 *to* は *tr* が *lm* に接触したことを含意すると述べている。つまり、この分析によれば、前置詞 *to* を用いる場合には *tr*、すなわち行為者にとって *lm* が存在することが必要不可欠であることがわかる。従って、与格構文においても *lm* にあたる間接目的語がなければ行為を遂行できない動詞は前置詞 *to* を選択すると考えられる。この知見を取り入れ、本研究では、与格構文における前置詞の選択を日本人英語学習者に指導する際、間接目的語なしでは行為を遂行することができない動詞は *to* 与格構文に、間接目的語なしでも行為を遂行できる動詞は *for* 与格構文になると指導する方法が有効であることを示したい。そのために、この指導方法が従来の指導方法と比べ、より効果的であるという仮説を立て、米子高専1年生(機械工学科、物質工学科、建築学科、電子制御工学科)を対象に検証を行った。

\* 原稿受理 平成 22 年 10 月 18 日

本稿は 2010 年 8 月 8 日に開催された第 36 回全国英語教育学会(於：関西大学)において「与格交替をどのように指導するか」という題名で口頭発表した原稿に加筆・修正を施したものである。

\*\* 一般科目

## 2. 調査方法

### (1) 被調査者

高専生（第1学年：機械工学科、電子制御工学科、物質工学科、建築学科）合計 169 名

### (2) 調査材料

一般に学校で使用されている文法の教科書（5社）から to 与格構文を取る動詞5個(give, lend, send, show, teach)、for 与格構文を取る動詞5個(buy, choose, find, make, sing)を無作為に選び出し、二重目的語構文から与格構文にした際、前置詞 to を選択するのか for を選択するのか1問1点のテスト形式で行った。なお、単語の難易度によって調査内容とは関係のない要素が結果に影響を与えないように、注に全ての英単語に対する日本語の意味を添えた。

### (3) 調査手順

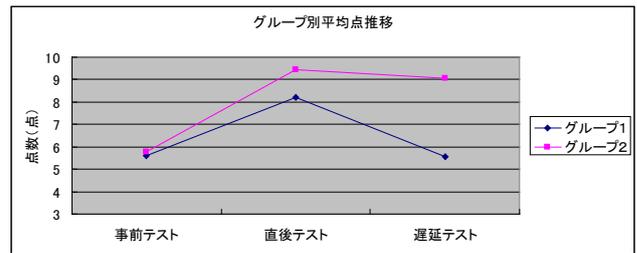
調査前の学習者の定着状況を把握するために、予告もせず、何の解説もせずに、試験時間5分で上記の単語についての事前テストを行った。1週間後、従来の指導方法に基づいて説明を行うグループ1と、仮説に基づいて説明を行うグループ2に分け、5分間、それぞれの方法で説明を行った後に試験時間5分で直後テストを行った。さらに、直後テストから1ヶ月後、予告なしで、また解説もせずに、試験時間5分で遅延テストを行った。事前テスト、直後テスト、遅延テストは全て1問1点の10点満点で採点をし、グループ1とグループ2の間におけるそれぞれのテスト結果について、有意水準5%とした  $t$  検定(両側検定)により平均点に有意な差が見られるかどうか分析した。

## 3. 結果と考察

### 3.1 直後テスト

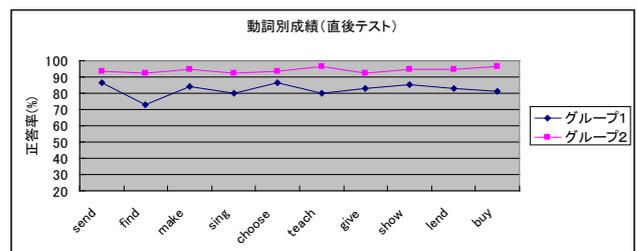
事前テストについて、グループ1とグループ2の平均に有意な違いがあるかどうかを確かめるために  $t$  検定を行った。その結果、グループ1 (N=89)の平均点は 5.61(SD 2.12)、グループ2 (N=80)の平均点は 5.78(SD 1.83)で、両者間には統計上有意な違いは明らかとならなかった ( $t=.55$ ,  $df=167$ ,  $p=ns$ )。しかし、直後テストについて、グループ1 (N=89)の平均点は 8.22(SD 2.31)、グループ2 (N=80)の平均点は 9.43(SD 1.88)で、両者間では統計上有意な違いが明らかとなった ( $t=3.72$ ,  $df=165$ ,  $p<.001$ )。つまり、与格構文における前置詞の選択を習得する際、従来の指導方法に比べ、仮説に基づいた指導方法が、より効果的であることが明らかとなった。総合点におけるグループ別の平均点推移をグラフで表すと、下のグラフ

1の結果になる。



グラフ1：グループ別総合点の平均

次に、直後テストにおける動詞別成績をグラフ2に示したい。



グラフ2：直後テストの動詞別正答率

グラフ2から、グループ1は動詞によって正答率のばらつきがあるのに対し、グループ2は全体的に高い正答率を示し、ばらつきも少ないことが考察できる。

直後テストにおける動詞別の正答率の詳細は下の表1を見られたい。

直後テスト	send	find	make	sing	choose
グループ1	86.5	73	84.3	79.8	86.5
グループ2	93.8	92.5	95	92.5	93.8
	teach	give	show	lend	buy
グループ1	79.8	83.1	85.4	83.1	80.9
グループ2	96.3	92.5	95	95	96.3

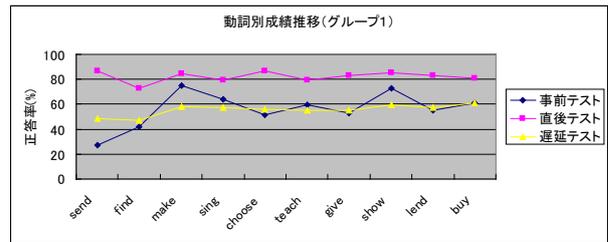
表1：動詞別の正答率（直後テスト） [%]

### 3.2 遅延テスト

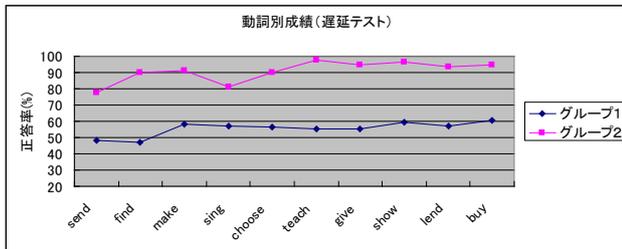
遅延テストについて、グループ1 (N=89)の平均点は 5.55(SD 3.23)、グループ2 (N=80)の平均点は 9.08(SD 1.70)で、両者間では統計上有意な違いが明らかとなった ( $t=8.99$ ,  $df=136$ ,  $p<.001$ )。遅延テストの結果を見られたい。

遅延テスト	send	find	make	sing	choose
グループ1	48.3	47.2	58.4	57.3	56.2
グループ2	77.5	90	91.3	81.3	90
	teach	give	show	lend	buy
グループ1	55.1	55.1	59.6	57.3	60.7
グループ2	97.5	95	96.3	93.8	95

表2：動詞別の正答率（遅延テスト） [%]



グラフ4



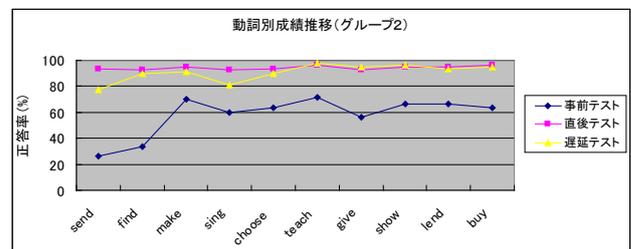
グラフ3：遅延テストの動詞別正答率

グループ1、グループ2、共に **send** の正答率が低いことがわかる。おそらくグループ1については、**send** は「送る」という行為について、ポストに投函するなどの一部分のみが概念化され、「方向性」と結びつきにくかったことが原因であろう。グループ2において誤答が多くなっている理由は次のようなものと考えられる。たとえば、日本語では「暑中見舞い葉書を送る」、「誕生日プレゼントを送る」などのように、「友人に」や「父親に」といった相手を明示する語句を欠いた表現が少なくない。また **e-mail** はボタン1つで簡単に送信できる。こうした日本語の用法や社会変化の影響を受けて、英語 **send** は、相手がいなくても行為を遂行できる動詞であるかのような錯覚を受けるのであろう。しかし、暑中見舞い葉書には宛先を書き、誕生日プレゼントにはカードを添えることから明らかなように、そもそも「送る」という行為には、相手の存在が前提となるのである。相手を省略した日本語の用法に引きずられて学習者の誤答が多くなっているとすれば、**send** を指導する場合には、宛先やカードといった具体的事例に言及するなどの工夫が必要であろう。

### 3.3 同一グループ内での動詞別成績

同一グループ内での試験の成績の推移を示したい。試験別の成績の変化を考察することで、教授法による定着度の違いを把握するためである。

グループ1の結果を考察すると、最終的に事前テストよりも正答率が低くなっているものがある。詳細については、**make**(事前テスト 75.28%、遅延テスト 58.43%)、**sing**(事前テスト 64.04%、遅延テスト 57.3%)、**teach**(事前テスト 59.55%、遅延テスト 55.06%)、**show**(事前テスト 73.03%、遅延テスト 59.55%)が挙げられる。**show** は10%以上の正答率が下がっているが、従来の教授法で「方向性」を表すのが **to** であると教えられたことが要因であると推測される。



グラフ5

グループ2の結果を考察すると、全ての動詞において事前テストよりも遅延テストの方が正答率は上がっていることがわかる。このことは、仮説に基づいた教授法は習得した内容の定着を一定の期間維持することが可能であるということの裏付けとなる。

## 4. まとめ

与格構文における前置詞の選択を習得する際、従来の指導方法に比べ、仮説に基づいた指導方法が、より効果的であることが今回の調査でわかった。直後テストではグループ1は動詞によって正答率のばらつきがあるのに対し、グループ2は全体的に高い正答率を示し、動詞の種類にほぼ関係なく、安定した定着が見られた。さらには、遅延テストにおける考察では、グループ1は事前テストよりも正答率が低くなっている動詞が見受けられ、従来の教授法は定着を妨げる何らかの干渉を受けていることがわかった。今後は従来の教授法と仮説に基づいた

教授法がそれぞれにおいて、何が正答率に影響を与えているのかを、さらに詳細に分析し、明らかにしていきたい。

参考文献

安藤貞雄 (2008) 『英語の文型』 開拓社, 東京.

Croft, W. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. University of Chicago Press, Chicago.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.

Kuno, S. (1979) "On the Interaction between Syntactic Rules and Discourse Principles," G. Bedell, E. Kobayashi, and M. Muraki (eds.) *Explorations in Linguistics*, 279-304. Kenkyusha, Tokyo.

Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago.

Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol*, Walter de Gruyter, Berlin and New York.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2: *Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.

Langacker, Ronald W. (1992) "Prepositions as grammatical(izing) elements," *Leuvense Bijdragen* 81, 287-309.

中川右也 (2008) 「二重目的語構文と与格構文をめぐって—構文指導における理論と実践—」 『CHART NETWORK』, 第 56 号, 19-22.

中川右也 (2010) 「与格交替をどのように指導するか—前置詞の選択を中心に—」 『第 36 回全国英語教育学会大阪研究大会発表予稿集』, 406-407.

中村芳久 (2001) 「二重目的語構文の認知構造」 『認知言語学論考』 No.1, pp.59-110. ひつじ書房, 東京.

Pinker, S. (1989) *Learnability and Cognition*, MIT Press, Cambridge.

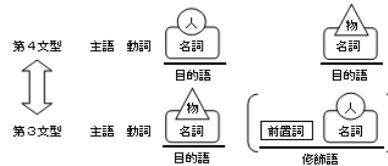
坂本真理子 (2001) 「日本人の英語学習による与格交替の習得についての質的調査」 『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第二部 No.50, pp.139-144.

Tyler A. and V. Evans (2003) *The Semantics of Prepositions: Spatial scenes, embodied meaning and cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.

山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 くろしお出版, 東京.

資料

第4文型から第3文型への書きかえ 学科 番 氏 名  
 第4文型の文と第3文型の文は書きかえることができます。第3文型の場合、「人」の前に前置詞 to や for を置きます。図を参考に、問題の ( ) 内に適切な前置詞(to, for)を入れなさい。



- ① I will teach you English. ※teach「教える」  
I will teach English ( ) you.
- ② I will buy you a new pen. ※buy「買う」  
I will buy a new pen ( ) you.
- ③ I will lend you my car. ※lend「貸す」  
I will lend my car ( ) you.
- ④ I will make you lunch. ※make「作る」  
I will make lunch ( ) you.
- ⑤ I will choose you a nice dress. ※choose「選ぶ」  
I will choose a nice dress ( ) you.
- ⑥ I will send you a nice present. ※send「送る」  
I will send a nice present ( ) you.
- ⑦ I will find you a taxi. ※find「見つける」  
I will find a taxi ( ) you.
- ⑧ I will sing you a song. ※sing「歌う」  
I will sing a song ( ) you.
- ⑨ I will show you my house. ※show「見せる」  
I will show my house ( ) you.
- ⑩ I will give you a book. ※give「与える」  
I will give a book ( ) you.